FLPS
Fuzoku Lounge for Practical Studies

ふぞく研究ラウンジ no.10

発行：2022.8.10
編集：鳥取大学附属学校部

「ふぞく研究ラウンジ」は鳥取大学附属学校４校園が取り組んでいる教育研究の「今」をお知らせする広報紙です。地域の教育関係者の皆様とともに地域の教育について考えるための「対話」の場をつくりたい、との思いからスタートしました。

第１０号では、附属学校園の教育実習の取組みを掲載しました。また、１２月発行予定の第１１号では附属学校園の研究を紹介する予定です。皆様からのご意見やご感想をお聞かせください。

附属幼稚園

鳥取大学附属幼稚園では、
３年生を対象とした基礎実習（主免許実習前半）、
４年生を対象とした応用実習（主免許実習後半）と副免許実習を行っています。

[1] 基礎実習（10～12月に10日間）

まず、観察実習では、保育に加わり子どもと一緒に遊びながら、幼稚園の物的・人的環境を観察し、子どもの理解を深め、保育の実際を把握します。次に、部分的に保育に参加し、教諭の職務、園児の活動を経験的に理解する部分実習を行います。そして最後の責任実習では、学級に配属された実習生複数名で一緒に保育指導案を立案し、分担しながら一日の保育を行っていきます。

[2] 応用実習（5～6月に10日間）

基礎実習と同じく、観察実習や部分実習を行います。責任実習では、幼児が必要な経験を積み重ねていくことができるよう、ねらいと内容（遊び）を考えて保育指導案を立案し、実習生１人で一日担任をして保育を行います。

幼児の自発的な活動としての遊びは心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、附属幼稚園では「遊びきる」保育を行っています。教育実習を通して、幼児理解の大切さ、その理解に基づく計画の立案や学級経営、さらには「遊びきる」保育の実施について体験的に学んでほしいと考えています。

学級担任とのミーティングでは、実習生から「計画した遊びがうまく広がらなかったが、どうしたらいいか」「全体を見るためには、どのような動きをしたらいいのか」「子どもへの接し方、適度な距離の取り方は」というような相談があり、具体例を挙げてさまざまなアドバイスをしています。実習指導は、私たち教職員にも保育を見つめ直す研修の機会となっています。

実習生の感想から

★遊びを広げていくときに、保育者が提案したり、子どもたちから引き出したりするなど、様々な方法があると感じました。子どもと一緒に遊びながら常にその先で起こることを想定しつつ、様々な選択をしていくことが重要だと思いました。

★１人１人と向き合い、子どもの思いを考えて遊びを提案することを目標に保育を行いました。挑戦と失敗を繰り返し、学ぶことができた２週間でした。

附属小学校

附属小学校は、年３回、教育実習生を受け入れています。１回目５月に行う主免許応用実習は、おもに３年次に主免許基礎実習を終えた４年生を受け入れます。２回目９月に行う主免許基礎実習は、おもに初めて教育実習を行う３年生を受け入れます。そして、３回目11月に行う副免許実習では、他校種の教員免許に加えて小学校教員免許状を取得しようとする学生を受け入れます。いずれも各２週間、年間計６週間の教育実習であり、毎年一定期間本校教職員は教育実習生に対して、熱心に指導に当たっています。

給食時間、全校児童に向けてリモートで自己紹介

[1] 附属小学校が大切にしていること

教育実習生にとっては、教育現場で実際に経験を積むことにより、教育の意義について理解を深め、教師としてのあり方について身をもって学ぶことになります。教育実習を通して、教育実習生が小学校教育の魅力を体感することで、小学校教育への一層の理解と教育に対する情熱を高める機会となることも教員養成の視点で大切にしています。

[2] 教育実習の実際

1 リモートによる教育実習生の紹介

教育実習生は各学級に配属されその学級を中心に教育実習を行います。同じ学年内では学習や活動を通じて交流があるものの、他学年とのつながりはほとんどありません。そこで、校内リモートを使って、ライブでの自己紹介を行いました。実習生にとっても、全校児童とつながりをもつことにより、多くの学びを得る機会をつくることになりました。

2 学校行事と運動会に参加

主免許基礎実習に参加した教育実習生は、運動会の練習と当日が実習期間に含まれる日程となりました。学級において教科学習を参観実践することはもちろん大切ですが、学校行事も大切な教育活動の一つです。運動会が実施計画に基づいてどのように当日を迎えるのか、当日はどのように運営されているのかを学ぶ機会となりました。

3 ICT機器の活用

今後、教育実習生が教育現場で実際に教壇に立つときは、教科・領域特有の学びの中に、効果的なタブレット端末の活用を位置付けた授業を行うことになります。そこで、教育実習中は各教科・領域の中で、少しでもICT機器の活用を授業実践に取り入れる教育実習としました。

運動会５年学年競技の補助で活躍する教育実習生

モニターに算数の問いを映し、学習を進める教育実習生

[3] 教育実習で配慮していること

３年次の主免許基礎実習で低学年を受け持った場合、４年次の主免許応用実習では中高学年の配属となるようにすることで、意図的に発達段階の違う児童の指導を体験する機会を作っています。また、２年間で２学年に配属することにより、複数の指導教員による複数の視点で指導を受けることができます。また、研究授業後の授業研究会は、実習生が討議の柱を考え進行も実習生が行います。実際に教育現場に出てからを想定して、授業研究会の企画運営を自ら行っています。

附属中学校

●附属中学校での実習の概要

附属中学校の使命の一つとして教育実習があります。本校では、毎年５月・６月・９月・11月の計４回（各回10～30名程度）の教育実習を行っています。５月は主免許応用実習（原則４年次）、９月は主免許基礎実習（原則３年次）、11月は副免許実習で、６月は他大学からの実習生を受け入れています。

実習生による教科指導（グループディスカッション）

●教育実習での工夫

主免許実習は、基礎実習と応用実習をそれぞれ２週間に分けて実習を行っています。基礎実習での経験や反省を生かし、応用実習に取り組むことで、学級指導や教科指導をレベルアップすることをねらいとしています。また、基礎実習と応用実習で同じ学年・担当教員にならないように意図的に配属を変え、より多くの生徒に対する指導、より多くの分野・教科領域での教科指導ができるように工夫しています。また、可能な限り同学年の同教科に複数の実習生を配属するようにしています。これは、実習生同士での連携や相談をしやすくすることで、自らよりよい実習を創り上げていく機会を増やそうというねらいを持ったものです。

●教育実習での学び

運動会や研究発表大会、文化祭など多くの学校行事がある中での教育実習ですが、実習期間中においても本校生徒にとって貴重な学びの場であることには変わりありません。その学びを保障するという点や実習生を育てていくという点において、すべての先生方は学級・教科指導などさまざまな場面で指導にあたっていただいています。また、実習生の指導を通して、本校の先生方ご自身の学びにつながったり、教師としてあるべき姿を考えさせられたりすることなどにもつながっています。

また、運動会や文化祭に向けての準備期間が実習期間中に重なることもあり、実習生にとっては、生徒がどのように行事にむかっていくのかということも学ぶ機会にもなっています。

「先輩に学ぶ」の様子

●実習生から学ぶ『先輩に学ぶ』

本校では、学活などの時間で『先輩に学ぶ』と題し、人生の先輩である実習生から、生き方についての話を聞く機会を設けています。実習生は中学校時代などのエピソードや大学での研究を紹介したり、実習生自身の経験をもとに生徒に向けて大事にして欲しいことなどメッセージを発信したりしています。

生徒にとっては自分たちと年齢の近い実習生の話ということもあり、興味深く耳を傾け、実習生からのメッセージをしっかりと受け取っています。

実習生にとっても、どうしたら自分の言いたいことが伝わるのかを考える良い機会となっており、生徒と感想や意見のやりとりをする中で、「学校は学び合う場」であるということを実感する時間ともなっています。

●最後に

近年、教員の働き方などがメディアで多く取り上げられ、将来教員になりたいと思う学生が減少しているのではないかと危惧しています。教育実習では大変なことも多いですが、将来教員を志望する学生が一人でも増えるように、本校の素敵な先生方の姿に触れ、教員の仕事のやりがいや楽しさを感じてもらえる教育実習になるように心がけています。

附属特別支援学校

附属特別支援学校では、
年２回（前期５月下旬から・後期８月下旬から）３週間教育実習を受け入れています。基礎実習を行う前には必ずボランティアを１回実施することとしています。

[1] 教育実習の実際

≪教育実習中の講座≫特別支援学校について基礎的な知識を身につけるとともに、本校の取り組みを学びます。

■講座名	担当
■特別支援学校教育の意義	副校長
■特別支援学校における学習指導	高等部主事
■各学部の指導法	各学部主事
■進路指導について	進路指導主事

■講座名	担当
■情報管理について	教頭
■情報管理について	教頭
■情報管理について	教頭
■学習指導案の書き方 ■教育実習の反省と課題等	教育実習主任

小学部：児童が興味をもてる教材や場面の工夫

≪担当授業・研究授業・授業研究会≫

教育実習生は、１学級に１～２人配属し、TT（チームティーチング）で学習を進めていきます。今年度はT1として１人２回指導案を作成したうえで研究授業を行い、各学部１名が代表で授業研究会を行いました。TTでお互いの役割を確認し、わかる・できるための支援を協力し合って準備していきます。授業研究会では、会場設営・進行を実習生が行い、積極的に発言し合うことで、より学びが深まる会としています。

協議の中では、T2が児童の内面のつぶやきを捉え、思いを一緒に言語化することで活動につながった場面も取り上げられました。

中学部：日本海新聞社へ一緒に体験

高等部：部活の経験を生かした指導

[2] 教育実習をとおして

生活を楽しむ子をめざして

本校は、６歳から20歳までの「自分づくり」を支える教育課程の創造を研究主題としています。自分づくりの支援として、やりたい心を育てる導入、教材教具の工夫や題材の選定、思いや願いを受け止め、共感することを大切にしています。実習生とともに教職員も他学級や他学部の授業を見ることで児童生徒の内面とライフステージを大切にした一貫した教育課程となっているか検証する場となっています。

池畔好日

●「ふぞく研究ラウンジ」第10号をお届けします。本号では附属の使命の一つである教育実習について学校園での実情を紹介しました。● 鳥取大学地域学部・工学部・農学部の学生200名ほどが、毎年附属で教育実習にのぞみます。基礎免実習と応用実習とを分けることで、学生が問題意識を高め、大学での学びを深めるねらいです。● 附属の先生方にとっては、毎年幾度も複数の学生を指導することで、自ら振り返りの機会にもなり、また学生から刺激を受けることもあるようです。教員という仕事の魅力を伝えようとされています。● 教育実習生同士の学びあいも見られます。幼児・児童・生徒にとってはフレッシュな先生方との出会いが、成長のきっかけづくりとなります。このように教育実習は、関係する皆が学びあう貴重な機会となっています。皆様が実施されている教育実習についても、アンケートでお聞きしたいです。